

『狭衣物語』蓮空本の本文世界について

楊 斌

一、はじめに

おびただしい異本で知られる『狭衣物語』の伝本は、三谷栄一氏の本文研究により、三系統に分類され、第一系統の深川本が最善本であるとされた¹⁾。三谷氏の成果に基づき、現在の『狭衣物語』研究は、深川本を底本とする校訂本『新編日本古典文学全集狭衣物語』（上下、小学館 一九九九年）を用いることが主流となっている。しかしながら、異本の存在自体が受容史であるような『狭衣物語』においては、多彩な異本の存在を無視することはできない。

こうした状況を踏まえ、本稿では、蓮空本を取り上げる。

二、蓮空本に対する従来の評価

蓮空本とは、室町期の公卿、甘露寺親長（一四二四—一五〇

〇、法名蓮空）の自筆本、および、その転写本の一群を指す。吉田幸一氏「蓮空本狭衣解題」（『狭衣物語 蓮空本下』古典文庫第一〇〇冊再版 一九八一年）に、天理大学附属天理図書館蔵甘露寺親長自筆本をはじめ、転写本として、四高本（現金沢大学所蔵）・九条家旧蔵本（大島本）・書陵部淡川本・学習院本（四高本の影写本）が紹介されている。

蓮空本について、はやくに、篠崎五三六氏「狭衣物語の基礎的研究」（『國語國文』第三卷第四号 一九三三年四月）は、「本書は各系統の本文が竄入して、前後連絡のない部分が多い事が注意される」とした。つづいて、三谷栄一氏「狭衣物語における伝本混乱の一過程―蓮空本を中心として―」（『狭衣物語の研究』本文系統論編）笠間書院 二〇〇〇年）も、「蓮空本は深川本系統ではなく純粹の大島本系統でもなく、さればといって流布本系統に属するものではなく、混合錯雑した一伝本にすぎないである」とした。

両論考は、蓮空本が各系統の本文を無秩序に取り合わせた混態

本文であると主張する。「混態」という呼称自体が、本文系統整理の立場からのやや差別的な言い回しに思える。

ところで、甘露寺親長自筆である天理大学附属天理図書館蔵本（巻一と巻二のみの零本）の巻末には、つぎに掲げるとおり、甘露寺親長による識語がある。

明応六年十月廿日於燈下終書寫畢 去七書初也 蓮空

（天理大学附属天理図書館蔵本巻一識語）
明応七年二月十一日書寫了 件本以外不審多如何と 蓮空

（天理大学附属天理図書館蔵本巻二識語）

また、四高本・学習院大学蔵本の巻三末に、つぎのようにある。

明応七年卯月一日終書写之功訖 蓮空

巻一は、明応六年（一四九七）十月七日より同二十日までをかけて、巻二は翌年二月十一日に、巻三は同年四月一日に、それぞれ甘露寺親長の手で書写されたのである。『狭衣物語』の諸伝本で、書写者と書写年次を限定できる本は希有である。くわえて、吉田幸一氏「蓮空本狭衣解題」（『狭衣物語 蓮空本下』古典文庫第一〇〇冊 再版 一九八一年）は、「蓮空本の本文は、蓮空が書写する際、自家の見解によって、他系統の本文を混入せしめたことによって生じた混態異文である」と、蓮空本を混態本としな

がらも、その「混態」は、本文の錯綜ではなく、甘露寺親長が転写時に「意図的に」混入した結果である、と踏み込んだ見解を示している。示唆的な指摘である。今一度、蓮空本を、甘露寺親長の文学的な営為としてとらえ直すことが必要となるのではないだろうか。

『狭衣物語』の本文異同は、諸系統の混態のみならず、各伝本が有する異文によっても生じる。これら異文は、蓮空本にも多く存在する。さきの吉田幸一氏論考に従えば、この異文も、甘露寺親長の見識によると想定できる。こうした観点から、本稿では、蓮空本の異文について論述する。以下、蓮空本は、天理大学附属天理図書館蔵甘露寺親長自筆本（同本は、所蔵機関の許可を得て作成した紙焼き写真を翻刻して用いる）の巻一を、本稿の調査対象とする。

三、蓮空本巻一異文の検討（二）

蓮空本の異文を検討する。検討の手順として、はじめに、『狭衣物語』巻一の各系統の代表本文（深川本・為家本・古活字本）と蓮空本との比較を通じて、蓮空本の異文を抽出し、そのうえで、異文を吟味することとする。比較する三本の引用典拠をつぎに掲げる。

・深川本：第一系統の代表本文。私家版『古典聚英』1『狭衣物語 上（深川本）』（古典文庫 一九八二年）

より引用する。

・為家本 ……第二系統の代表本文。私家版「古典聚英」2『狭衣物語 上（為家本）』（古典文庫 一九八三年）より引用する。

・古活字本…第三系統の代表本文。古典資料類従7『狭衣物語 元和九年心也開版古活字本』（勉誠社 一九七七年）より引用する。

なお、右とはべつに、中田剛直氏『校本狭衣物語』（巻一桜楓社 一九七六年）、『狭衣物語諸本集成』（第一巻―第六巻笠間書院 一九九三年―一九九八年）に掲載される諸本を引用する場合がある。引用に際しては、原文の表記をできるだけ尊重することとするが、適宜、句読点を補い、原文の補入や見せ消ちなどは訂正後の本文で示す。必要に応じて、傍線等を付している。

物語巻一、狭衣は、仁和寺の僧に連れ去られそうになった飛鳥井女君と出会い、忍んで通う仲となる。つぎに挙げた本文は、女君誘拐事件を招いた事情の説明で、よるべのない飛鳥井女君を養う乳母が仁和寺の僧を頼るようになった経緯が書かれている。

この女はそちの中納言といひし人のむすめなりけり。をやたち
ちはみなうせにければ、めのとの、かそへのかみといふもの、
めにて、なまたよりあるか、思かしつきて、としころすこしけるを、
そのおとこうせてのちは、いとわりなきありさまにてありければ、
にわしのめきしといふものをかたらひ

て、かれにこの君の事をあつかはせけるに、おほけなきこゝろありける物にて、人しれす思ふ心つきて、かゝるわさをもしたるなりけり。

（深川本 巻一・五八丁表―五八丁裏）

この女は、帥中納言のむすめなりけり。おやたちみなうせて、めのとの、かそへのかみのめにてありける。ただ、このやうにてすてやしなはひける、その男うせにければ、いとわるきありさまにて、にはしの一院のへたうするめきしのうしろみして、時／＼とふに、かゝりてあるなりけり。このひめ君お思ひかけて、いかでと思けるをしらす、くるまなど、又かゝるへき人もなくて、うつまさにゆき返のたよりおよろこひてめすみもてゆく也けり。

（為家本 巻一・五三丁表―五三丁裏）

此女は、そちの中納言といひける人のむすめなりけり。おやたちみなうせにければ、めのとの、かそゑのかみなといふもの、めにて、なまどくありけるか、またなき物に思ひかしつきて、とし比ありけるを、おとこうせて後は、わりなきありさまにてすくしければ、この仁和寺のいのりの師をかたらひて、これにこの君の事をもしりあつかはせければ、おほけなき心ありけるものにて、人しれす思心つきて、かゝるわさはしたるなりけり。車なども、又かゝる人なくて、うつまさにゆ

き、のたよりをよろこひてぬすみもて行なりけり。

(古活字本 卷第一之上・四〇丁表—四〇丁裏)

深川本と古活字本は、傍線部の本文が異なり、古活字本の波線部に相当する部分が深川本には見当たらない。この違いを除けば、両本はほぼ同文である。これに対し、為家本は大きく違う。為家本の傍線部「たた、このやうにすてやしなはひける」は、「すてやしなはひける」の部分の意味が不明である。そこで、為家本巻一に近似する慈鎮本と前田本を見ると、慈鎮本は「た、このやうにすてやしなひける」、前田本は「た、このやうにしてやしなひける」である。前田本によれば、「我が子のようにして養つてきた」と解釈できる。これを参考にすることとした。あるいは、為家本のこの箇所は誤写か。

さて、蓮空本は、これらとはまったく異なる叙述である。

この女は、帥の中納言といふ人のむすめなりけり。おやたちみなうせにければ、めのとの、かすへのかみなといふもの、めにて、たえくしくて、あけくれは、はかくしからすなから、またなきものにかしつきて、としころありけるを、そのおとこうせてのちは、いとわりなきありさまにてありければ、この仁和寺のいのりの師をかたらひて、かれにこの君をしりあつかはせければ、人しれす思ふ心つきて、かゝるわざをなんしけるなりけり。

(蓮空本 卷一・三三丁裏—三三丁表)

傍線部にある形容詞「たえくし」とは、「あるべき物事や関係がとぎれがちであるさま。また、そのために物が乏しく生活に困っているさま」(『角川古語大辞典』角川書店)の意である。したがって、蓮空本の傍線部は、乳母が、「生活は貧しくて、たよりない日々ながら、姫君(飛鳥井女君)をまたとないものとして大切に育てている」ことをあらわしている。さきの深川本「なまたよりあるか」や古活字本「なまときありけるか」が、「いささかなりとも生活の方便を有した乳母」と描くのと異なっている。それに比べれば、蓮空本の乳母は、困窮した状態であるにもかかわらず、飛鳥井女君を大切にして養っているのであり、より人情深い性格が描写されているといえよう。

つぎは、乳母が、狭衣の乳母子道成と謀って、飛鳥井女君を欺き、筑紫行きの船に乗せようとするくだりである。

えくちのわたりのせうよう、このたひはふようなめり。大貳とのいそぎ給なといふすかた、けしきのつきくしきを、なに物ならん、かものまつり、行幸などにや、別當のくの物にておそろしけなるものとも、さ、けつ、などあるものこそ、かやうにはみゆれと、うとましけなるに、車によりきて、御前はとく船にたてまつりねとて、かきいたきてのせうつすほとの心ち、いか、はありけん。めのと、こゝろ行けにして、

ものいひ、えかちになるをきくに、ねたうかなしきこと、よのつねならず。

(深川本 巻一・九九丁表—九九丁裏)

中納言殿、人／＼は返まいりね。大に殿はいまはおはしましぬらんと思へは、よるをひるにていそぎたるへければ、ゑくちのわたりのせうえうすきさふらひぬへきよしを申給へと、左衛門大夫にもきこえよといふをみれば、行幸、かものまつりなどのおりに、別當のしりに、ほことかやいふ物もちて、ありしやうのさうそくたちて、またらにしないたるに、たもとおとろ／＼しうあかみて、ひけくろらかなるを、あなおそろしとかしらのかみもあかる心ちするに、くるまによりきて、御ふねにたてまつりねとて、かきいたきてのせうつすほとんち、いかにありけん。めのと、心をちいて、しえたりと思たる気色お、ねたくなしなどは、よのつねなることをこそいひけれ。

(為家本 巻一・八〇丁表—八二丁裏)

えくちのせうえう、このたひはふようなめり。大貳殿いそぎ給ふなど、ほこりに打ちわらひたるを、何物ならん、行幸、かものまつりなどに、別當のしりにやおそろしける物さけつ、ある物こそ、かゝるかたちはしたれと、みるたにうとましけなるに、車によりきて、御ふねに奉りねとて、かきいた

きてのせうつすほとんち、いかばかりかはありけん。めとの、心ゆきてものいひ、ゑわらひなとするをきくに、ねたうかなしともよのつねなり。

(古活字本 巻第一之下・二五丁表—二五丁裏)

この箇所も、深川本・古活字本の本文が似通っており、為家本が異なる。それぞれの傍線部には、突然出現した男(道成)の姿と、それを見る飛鳥井女君の気持ちを描かれている。深川本・古活字本では、「おそろしけるもの(物)」を具す姿から、女君は「うとまし」と感じている。為家本は、「ほことかやいふ物もちて、ありしやうのさうそくたちて、またらにしないたるに、たもとおとろ／＼しうあかみて、ひけくろらかなるを」と、男の装束が具体的に描かれるうえ、女君の気持ちも「かしらのかみもあかる心ち」であり、より恐ろしさが強調されている。

つぎに、蓮空本を掲げる。

大貳殿いそぎ給なめり。えくちわたりのせうえうふように侍りなど、ほこりにうちわらひたるけしき、つき／＼しさ、なに物ならん、きやうかう、かものまつりなどに、別當のしりに、かやうのおそろしける物ぞ、かゝるかたちはしたると、うとましとみるに、めのとほ、あなきよけや。なまきんたちなに、かはせん。あなめてた。中納言殿の人もさなか、この御ともにありけり。かはかりにてくたるすりやう、

世にあらしといひあはせつゝ、めてたしと思ひたるに、くるまによりきて、さらは、とく舟にたてまつれとて、かきいたきてのせうつす心ち、いかはかりありけん。めのと、心ゆきて物いひ、えわらひなとするも、ねたくなしなともよのつねなり。

(蓮空本 卷一・五五丁裏―五六丁表)

傍線部は、深川本・古活字本とは同じである。しかしながら、蓮空本には、三系統の本文には見られない波線部のような異文がある。ここには、傍線部の女君が抱いた恐怖感や嫌悪感とは対照的に、中納言殿（狭衣）の恩恵を受けた道成と大貳殿一行のめでたさを述べる乳母の満足気な様子が表現されている。

蓮空本の乳母は、苦しい生活にもかかわらず、飛鳥井女君を養う情の深い人物であった。しかし、この部分で、道成に同調し、女君をだまして船に乗せる協力をするというのは、一見矛盾しているようでもある。だが、これも、困窮というやむにやまれぬ事情があったための行為とすれば、納得できる。むしろ、より緻密に乳母の人物造型がなされているのが蓮空本であるといえよう。

四、蓮空本巻一の異文の検討（二）

前節で、女君の乳母に関する異文を検討した。本節では女君に関する異文を検討する。

仁和寺の威儀師が音信不通となり、いよいよ生活に窮した乳母は、陸奥の將軍とともに奥州へ下るといい、飛鳥井女君も同行を懇願する。つぎの場面には、狭衣に下向を打ち明けることのできない女君と、女君方の事情を知らぬ狭衣との、思いのすれ違いが語られる。

とかくこそはとほのめかさんもつゝ、まして、なにとはなくおもひみたれたるけしきのみまされは、かくおほつかなきありさまのたのみかたさのつらきにやと心くるしけれと、かくおもひかけぬありさまをは、しはしひともしらせしとおはせは、わか身をも、あまのことたになのり給へ。さらはなと、心くらへにいひなしつゝ、わか御心さしのあさからぬを、つゐになとおほしたのみて、ゆくすゑとをくちきり給。またならひ給はぬ事なれと、なしはらのとまでそおほしける。

(深川本 卷一・六二丁裏―六三丁表)

さはいまいくかにしてはと心ほそく思ひなから、さやうにもほのめかしきこゑす、たゝなにとなく思ひほれたるけしき、あはれにおほえ給事かきりなし。たれともなきありさまを、ついに、はつかしと思ふにやと、あはれなれば、心のかきりちきり給つゝ、たれとたにしらぬおほつかなさを思ひ給へと、なにかはついに見えはてきこゆへきものならぬ物ゆゑ、

はか／＼しからぬなのりきこえむ。けに、さはかりこそはおしはかるゝ、ありさまなれば、せちにもといあらはし給はす。かゝるほとに、なつもすきて、秋のはしめにもなりぬ。

(為家本 卷一・五五丁裏—五六丁表)

かくこそなとほのめかし聞えんも御心のうちをしらねはつ、まして、たゝなにとなく思ひみたれたるけしきなるを、猶かくおほつかなきありさまのたのみかたく、つらきにやと心くるしけれと、またわか行ゑをもあまの子とたになのらねは、こゝろくらへにて、たゝあはれにおほえ給まゝにいひなくさめつゝ、この世ならぬ契をそかはし給ける。かゝるほとに、夏もすき、秋にもなりぬ。

(古活字本 卷第一之上・四三丁表)

各系統の代表本文は、傍線部のように、何というわけではなく思い悩んでいる女君の様子が描かれ、いつまでも素性を明かさない自分の曖昧な態度が女君を悩ませているのであらうという狭衣の思い込みが続く。両者は、お互いに名乗ることもない。女君は「あまの子とだに名乗らず」(深川本・古活字本)、狭衣は女君を「たれとたにしらぬおほつかなき」(為家本)のまま、何ら現実的な見通しの持てない関係を重ねるのである。

同じ場面が、蓮空本では、つぎのようになっている。

かくこそなとほのめかしきこえんも、御心のうちをたにしらねはつゝ、まして、たゝなにとなく思ひみたれたるけしきを、中／＼みそめし比よりも心くるしけなるを、かくおほつかなきありさまの、たのみかたくつらきにやと、心くるしけれと、又わかゆくもあまのことたになのり給へ。さらすはなと、心くらへにて、たゝあはれにおほしたまふまゝに、いひなくさめ、この世ならぬちきりをもし給ける。女も、つゐにみえはてられきこゆへきかは、はか／＼しからぬなのりをきこえてこそとおしはかるゝ、ありさまなれば、と思ひける。かゝるほとに秋にもなりぬ。

(蓮空本 三五丁表—三五丁裏)

蓮空本では、傍線部に続いて、波線部「中／＼みそめし比よりも心くるしけなるを」とある。思い悩む女君のありさまを受けて、ほかの本にはない、「出会ったころよりも苦しげだ」との、狭衣の側からの印象が補われている。さらに、破線部は、為家本の破線部の異文に通じ、「女も、たいしたこともない素性を申し上げたところで、結局添い遂げ申し上げることなどできようものか(いやできはすまい)、と思つたのだつた」と、狭衣との関係が長くは続くまいと絶望し、女君が名乗らない理由が加筆されているのである。これによって、蓮空本は、狭衣と女君との心理的な懸隔がより明確に描き出されている、ということができよう。ほどなく、道成が狭衣の家来であると気づいた飛鳥井女君は悲

嘆する。道成は、女君に強引に迫る。つぎは、絶体絶命の女君が入水を決意する場面である。

いたうもあやにくからず、僧ともにいのりせさせなと、もてあつかひつゝ、はひよりては、とさまかうさまにいひうらみつゝ、一日もなみになと、すさみふしたるをさくも、あひ行なくゆゝしうて、いかにせまし。かくうきをしらぬいのちなかさには、つゐに、いかにならんすらんと思に、すへき方のなければ、この海にやをちいりなましと仏事を念したてまつるに、めのとの、いとめてたき物ともとりちらしつゝ、よろつにいへと、みつをたに見入れて、日ころになりぬれば、いてや、さは思ふ事そかし。やすらかにてみへたてまつり給は、いかにかひくしくおほしよろこはん。いてや。うちなき、くちをしかりて、た、我身にてこのかひはとりかさねける。

（深川本 卷一・一〇七丁表—一〇七丁裏）

いたくもあやにくからて、人もなみになと、すさみふしたるも、いとあいきやうなくゆゝしうて、いかてきかし、た、とくおち入なはや。神仏を念したてまつるに、めのと、いとめてたきものとおお、とりにきわひつゝ、よろつにいと、ゆをたにみいれ給はず、日ころになりぬれば、いてや、さは思ひしことそかし。やすらかにてうちみたてまつり給て、いかに

いと、ひかくしうおほしよろこはん。いかてやと、うちなけき、くちをしかりしは、た、我身にそ、のかいはとりかさねける。

（為家本 卷一・八五丁表—八五丁裏）

いたくもあやにくたへす、くたる僧ともに祈せさせなと、よろつにもてあつかひつゝ、はひよりては、とさまかうさまにいひうらむるをきくたひことに、いかにせまし、かくうきをしらぬいのちなかきにて、つゐにいかならんと思ふに、すへきかなければ、このうみにやおちいりなましと思なりぬ。

（古活字本 卷第一之下・三〇丁裏—三〇丁表）

ここでは、古活字本が為家本と異なり、深川本は、古活字本に近似する本文を有すると同時に、為家本に近似する本文も有している。三系統の代表本文とも、追いつめられ、入水するほかないと思に至る女君の内心が述べられるのである。

これらに対して、蓮空本の本文はつぎのとおりである。

いたうもあやにくからず、くたる僧ともに祈せさせなと、よろつにもてあつかひつゝ、はいよりて、とさまかうさまにうらむるをきくたひことには、いかにせまし、とかくうきをしらぬ命なかさにては、つゐにいかになりなんとおもふに、すへき身なければ、このうみにやおちいりなましとおもひなり

ぬ。後にもききあはせ給はんに、心きよくてやみにけりと
かれたてまつらんと、ひまをまち給ふ。

(蓮空本 卷一・五九丁裏)

蓮空本のこの箇所は、古活字本と同じような叙述ながら、三系統の代表本文に見られない、傍線部のような本文を有する。傍線部は、「後になつて狭衣が聞き合わせなさつた時に、潔白なまま死んでいったと耳になさるやうにと、女君は、入水の機会を待ちになる。」と、ひたすら狭衣の思惑を氣にする女君の氣持ちが附加されるが、実は、この異文と近似する本文がこの場面の前にも存在する。その箇所の蓮空自筆本は一丁の欠文があるため、四高本によつて示す。

もし命おもふにかなはてなからへは、ゆくすゑにき、あはせ給やうもあらは、さてこそあはれときかれたてまつらんは、いますこし心うかりなんかし、なとて、よしの、おくのしらぬわたりの物にてたにあらて、かくしたしくき、あはせ給へりけるゆかりにしもありけん、とをきほとまていきつきて、このありさまみあつかはぬさきに、たゝいかにしてもしぬるわさもかなと思へと、

(四高本 卷一・六一丁裏)

狭衣の扇を見て事情を合点した女君が、道成には決して従うま

いと、死を決意する場面である。傍線部は、さきほどの異文とは
ば同じ文言である。女君は、自分が心きよくて、道成と関係せず
に終わったと狭衣に知ってもらいたいと望む。この場面の内容を
繰り返し叙述し、女君の狭衣への思いの深さを強調するのであ
る。

つぎに、物語卷一末、飛鳥井女君が、筑紫行きの船に乘せられ
たのち、入水しようとしている場面を検討する。

死を覚悟した女君は、とうとう一人になる機会を得る。

うちむつかりて、たちぬるまゝにかみもたけて、みわたすに
人ゝもねたるさまなれば、うれしとはよのつねならず思ひ
ながら、さはこよひやかきりなるらんと思はんには、つらか
らん人たに思ひてられぬへし。まして、われやわする、人や
とはぬと思しは、をこなりけりと思ひつ、けたちぬれば、な
みたの海に身はやかてうこかれて、つくゝとおきのかたを
みやれば、そらはつゆのうき雲もなく、月さやかにすみわた
りたるに、うみのをもても、きし方行すあみえす、はるゝ
とみわたされて、よせ返浪はかりみえわたりつゝ、船のはる
かにこき行かいと心ほそき聲にて、むしあけのせとへこよと
うたうか、いとあはれなれば、

(深川本 卷一・一一四丁表―一一四丁裏)

かしらをもたけて、みわたすに、人ゝもねたるさまなれ

は、うれしとはよのつねならず思ひながら、こよひやかきりならんと思ひは、つらからさらん人に思ひいてられぬへし。まして、われやわする、人やとはぬと思ひしは、おこなりけるはさかなと思ひつゝ、けたちぬれは、涙のうみにやかて身もうきいて、うこかれす。おきのかたのつまとおしあけてみいたせは、そらはいとのかなるに、うきくももなくすみわたたりて、山ははるかにて、うみのおもてはるゝとゆくゑもはても見へぬに、こきゆくふねのはるかにゆくかむさきのせとにや、ほそきこゑにてうたいたるほのかにきこへたるにも、

（為家本 卷一・ 八九丁裏―九〇丁裏）

かしらもたけて、つくゝとおきのかたをみやれば、そらはいさ、かなるうき雲もくて、月のさやかにすみわたたりたるに、うみのおもては、きしかたゆくすえもみえず、はるゝとみわたされたるに、よせかへるなみはかりみえて、ふねのはるかに消ゆくか、心ほそき声して、むしあけのせとへこよひとつたふも、あはれにきこゆ。

（古活字本 卷第一之下・ 三三五丁表―三三五丁裏）

三系統の代表本文には、それぞれ、月が煌々と輝く夜の、船中の様子が描かれている。深川本と為家本とは、傍線部の「われやわする、人やとはぬ」によって、狭衣を思い出して涙にくれる女

君の胸中を詳述する。「われやわする、人やとはぬ」は、新編日本古典文学全集『狭衣物語』に指摘があるように、つぎの歌を踏まえていると考えられる。

紀のむねさだが東へまかりける時に、人家に宿りて、暁いでたつとて、まかり申ししければ、女のよみていだせりける

読人しらず

えぞ知らぬいま心見よ命あらば我や忘るる人や訪はぬと

（『古今和歌集』卷八離別三七七）^③

女君の胸中が描写される点というでは、つぎの蓮空本も同じである。

かしらもたけて、つくゝとおきのかたをみやれば、空はいさ、かなる雲もなく、月かけさやかにすみわたたりて、うみのおもて行ゑもはてもみえず、はるゝとみえわたされたるに、人はみなねいりにければ、うれしくおもひながら、今夜は、さは、この世のかきりとおもふには、うきもうからぬなれば、なみたのうみにうきいて、なかれてぬへし。おきのかたのつまとをしあけてみわたせは、そらくかりのむらかりて、うき雲のやうにみえて、月のみそこふかくすみわたるに、よせたる波はかりみゆるは、かゝらぬ事にてたにみまし

かは、おかしかりぬへきを、たゞ涙にくれてなに事もみえぬに、舟のはるかにこき行か、いとほそきこゑにて、むしあけのせと、うたふも、いとあはれにきこゆ。

（蓮空本 巻一・六三丁表―六三三丁裏）

蓮空本の傍線部は、深川本や為家本とは異なり、「我や忘るる人や訪はぬ」がなく、それに代わって、「うきもうからぬ」との異文がある。「うきもうからぬ」とは、つぎの『大和物語』一四三段の和歌を踏まえていると考えられる。

むかし、在中将のみむすこ在次の君といふが妻なる人なむありける。女は山蔭の中納言のみめひにて、五条の御となむいひける。かの在次君のいもうとの、伊勢の守の妻にいますかりけるがもとにいきて、守の召人にてありけるを、この妻の兄の在次君はしのびてすむになむありける。われのみと思ふに、この男のはらからなむ、またあひたるけしきなりける。さりければ、女のもとに、

忘れなむと思ふ心の悲しきは憂きも憂からぬものにぞありける

となむよみたりける。今はみな古ごとになりたることなり。

（『大和物語』一四三段⁴）

相手を忘れてしまおうとする悲しみに比べれば、「憂きも憂か

らぬ（つらいこともつらくはない）」のである。女君にとつて狭衣を忘れることが、どれほど深刻な事態であつたのかがうかがわれる。入水を決心してから、女君が悲しみに浸る様子を鮮明に描いている蓮空本は、引歌を効果的に用い、女君の深い悲しみを、どの本よりも明確に表現しているように思われる。

これにつづく蓮空本の傍線部では、女君が妻戸を押し開けてまわりの様子をうかがっている。為家本と類似しているが、為家本では、女君が見たのは「そらはいとのとかなるに、うきくももなくすみわたりて」である。これに対し、蓮空本では、「そらゆくかりのむらかりて、うき雲のやうにみえて、月のみそこふかくすみわたるに」とある。蓮空本は、女君の悲しい心境がきわだつような本文になっている。

さらに、破線部「かゝらぬ事にてたにみましかは、おかしかりぬへきを、たゞ涙にくれてなに事もみえぬに」と、月に照らし出される景勝とは対照的に、女君の追い詰められた心情を強調するのである。

蓮空本の異文は、女君の揺れ動く心を詳細に描き出している。特に、女君の悲しみを、蓮空本は三系統の本文よりも、深く描いている。こうした異文により、女君の入水直前の心の動きは、より詳しく読み手に伝わることになると思われる。

五、分析結果

以上、蓮空本の異文を、三系統の代表本文の深川本・為家本・古活字本と比較しながら検討した。以下に、蓮空本の異文の性格をまとめる。

巻一において、蓮空本の異文は、次の二点に集中して見られた。

・飛鳥井女君の乳母に関わる描写（本稿第三節）

・飛鳥井女君の心理（本稿第四節）

物語の主人公である狭衣、ではなく、飛鳥井女君と飛鳥井女君に係る乳母について、とくに長大な異文が見られるのは何故であろうか。飛鳥井女君の物語は、のちに、室町時代物語『狭衣の草子』として独立するほど、人々の心を引きつけた文学的な題材である。こうした魅力ある登場人物について、その性格を、より豊かに補うかのように、あるいは、悲劇的な運命をたどる女性の心に寄り添うかのように、蓮空本は描いている。本稿のはじめに触れた吉田幸一氏の指摘に従うならば、これこそが、甘露寺親長の「意図的」な操作なのではないだろうか。

六、おわりに

蓮空本は、随所に長大な異文を有していた。それらは、決して

無秩序に混入したのではなく、特定の登場人物に関する一連の物語を、より豊かに描き出すという目的で補われたもののようであった。また、『狭衣物語』を代表する三系統本文とは、かなり性格の異なるものでもあった。つまり、蓮空本は、『狭衣物語』の異本の一本でありながら、独特の本文世界を展開する本であるといえる。ここに、『狭衣物語』の物語享受の一端を見ることができるよう思う。

注

- (1) 三谷栄一氏『狭衣物語の研究「本文系統論編」』（笠間書院 二〇〇〇年）所収の諸論文により、同氏の異本研究を知ることができる。
- (2) 該当箇所の為家本は、『狭衣物語全註釈』（おうふう 九九九年）の【異本系統】では、「第二系統」本文として、「ただ、子のやうにて過ぐし養は（衍力）ひける」と掲出されている。「過ぐし」は、翻刻の誤りか。
- (3) 『古今和歌集』は、新編日本古典文学全集（一六一頁―一六二頁）より引用した。
- (4) 『大和物語』は、新編日本古典文学全集（三六二頁―三六三頁）より引用した。

（よう・ひん 本学大学院博士後期課程）